

MINI 性格検査に追加された建前, ストレス症状, 非行の3つの特殊尺度について

村上 宣寛

(1996年10月21日受理)

The three special scales added to the MINI personality inventory : The attitude for an employment examination, the stress syndrome, and the juvenile delinquent scales.

Yoshihiro MURAKAMI

Abstract

The purpose of these studies was to develop the efficient special scales of the MINI personality inventory. The first analysis was to construct the attitude scale for an employment examination, based on the comparison of the MINI items for 77 students who experienced employment examinations, and the MINI items for 178 controlled students. The second analysis was to construct the stress syndrome scale, based on the correlational analyses between the total score of the Japanese version of Willson's teachers stress diagnosis scale and the responses of the MINI items for 102 teachers. The third analysis to construct the juvenile delinquent scale, based on the comparison of the response for the MINI items between 31 delinquent boys and 65 non-delinquent boys.

key words : attitude, stress, delinquency, special scales, MINI, Minnesota Multiphasic Inventories

MINI 性格検査とは

アメリカの心理学や精神医学で広く使われている心理検査は MMPI であり, 利用者の過半数はコンピュータによる自動解釈サービスを受けている。ただ, MMPI が成立してから40年以上が経過してしまい, 言葉使いの古めかしさ, 標準化の不完全さなどが目立つようになった。Butcher, Graham, and Ben-Porath(1990)は質問項目修正

や入れ替えを行い, 内容尺度を追加した567項目の MMPI-2 を作成した。現在, アメリカでは MMPI-1 から MMPI-2 へと移行しつつある。しかし, 質問項目の修正や追加は主観的な観点から行われており, 項目分析は行われていない。測定論の観点から MMPI-2 を見ると, なんら MMPI-1 と変わるところがなく, 期待はずれという評価が定まりつつある (Helmes and Reddon, 1993)。一方, MMPI は日本ではほとんど用いられてい

ない。村上・村上(1994)に示されているように、三京房版の翻訳はあまりにも原文からかけ離れているため、研究に用いられるような状態ではない。また、解釈についての知識が乏しいため、精神医学的な診断にも利用されていない。村上・村上(1992)はMMPIオリジナル版566項目を忠実に翻訳・標準化し、コンピュータ自動解釈のプログラムを開発し、日本でもようやく利用可能になった。三京房版も村上・村上(1992)の批判を受けて翻訳の入れ替えを行った(MMPI新日本版研究会編, 1993)が、相変わらず翻訳は原文から遠く隔たっており、日本でMMPIの研究を行うには村上・村上(1992)のMMPI-1を利用する他ない。しかし、MMPI-1は566項目、MMPI-2にしても567項目あり、実施に1時間前後が必要で、被験者に対する負担も無視できない。また、MMPIは1940年代の手法で試行錯誤的に作成された基準関連の質問紙(村上, 1993)であるため、各項目と尺度の総得点の関係を調べると、総得点になら寄与していない項目も多く存在する。

MINI (Mini Personality Inventory)はMMPI-1の基本尺度(妥当性尺度と臨床尺度を指す)との相関を.90以上に保ちつつ、このような無駄な項目を除去して作成された250項目の質問紙である。全項目の因子分析を行うと9因子が得られ、直交回転できれいな単純構造が得られた。相関係数の大きさを項目の重要度とみなし、相関係数の小さな項目から順に除外し(partial out)、 α 係数を最大化するように項目選択を行った結果、DEP(抑鬱感・無力感・心労)、ASS(交際嫌い)、SUS(猜疑心・不信感・敵意)、PAR(妄想型分裂病)、BOD(身体症状)、SOC(社会的内向)、TEN(緊張・心労)、FEM(女性的興味)、SAD(分裂感情障害)の9つの内容尺度が作成された(村上, 1991)。

MINIは独自の内容尺度が追加されているので、MMPI-1の短縮・改訂版である。MINIの再検査信頼性は基本尺度で.70~.88、内容尺度で.80~.93とかなり高い。また、MMPI-1の基本尺度との相関が.90~.95と同一の解釈を行っても許される水準である。MMPI-1の基準関連妥当性が高いので、MINIの基本尺度も同等と思われる。

MINIは項目数をMMPI-1の半数以下にしたた

め、MMPI-1で開発された多くの特殊尺度は利用できない。しかし、MINIは250項目から構成されているので、これを基礎にして新たに特殊尺度を作成することが可能である。

第1の研究は、就職試験を経験した大学生と対照群の大学生にMINIを実施して、項目への応答を比較し、就職採用試験での建前(嘘)を測定する特殊尺度を開発するものである。第2の研究は、MINIと日本版ウィルソン・ストレス診断尺度を教師に実施し、MINI質問項目とウィルソン尺度の総得点との相関分析によってストレスを測定する特殊尺度を作成するものである。第3の研究は、非行少年と普通少年にMINIを実施し、項目分析を行い、非行傾向を測定する特殊尺度を作成するものである。

建前尺度

目 的

一般企業の採用試験でも適性検査と称して多くの心理検査が実施されている。世間的には信頼され、よく使われているものにY-G、内田クレペリンがある。Y-Gや内田クレペリンは教員採用試験や就職試験での適性検査として多く使用され、信頼性が高いと信じられているが、マニュアルに記載されている再検査信頼性は156項目の旧Y-Gのデータである。現尺度の信頼性係数の推定値は尺度の平均0.66、範囲0.51~0.79で、0.70以上は6尺度にすぎず、0.60以下は3尺度もある。また、基準関連妥当性は有意差の検討以外の研究がなく、妥当性係数は不明である。一方、内田クレペリン検査の作業量の信頼性係数は0.90と高いが、性格判定で重視されている作業曲線の信頼性係数は個人差が大きく、0.13~0.93の範囲に散らばり、平均は0.56と低い。基準関連妥当性の研究を再分析した結果、妥当性係数は0.2~0.3前後と推定された(村上, 1993, 6,8章参照)。すなわち、世間的な評判とは裏腹に、信頼性も妥当性も乏しい検査である。

また、採用試験という状況では回答に意識的な歪曲が混入することは避けられない。たとえば、

Y-GにはL尺度に相当するものがなく、よい印象を与えるように回答しても見抜くことはできない。採用試験でY-Gを実施するとDタイプが異常に多いことからかなりの受験者が建前で回答していると思われる。この意識的な歪みは、自分を良く見せようとして社会的に望ましい反応 (Social Desirability) をする傾向の一種である。内田クレペリン検査も練習をしてから受検することがある。直前の作業量が目の前にあるため、作業曲線が凸凹にならないように、配慮しながら作業を進めることは難しいことではない。

MMPI-1やMINIにはL(虚言)、F(頻度)、K(修正)という妥当性尺度があるので、ある程度の反応歪曲や防衛的態度は測定できる。たとえば、L尺度は、ありふれた些細な嘘、自分の欠点、怒りや攻撃性などの項目から構成され、よほどの人でないと否定しない内容である。そのため、粗雑で洗練されていない嘘に極めて敏感に反応する。しかし、教養がある人の意図的に計算された嘘は見抜くことはできない。F尺度は正常者では滅多に反応しない方向の回答を選んで尺度化したもので、精神障害がある場合や、でたらめな回答をするとき敏感に反応する。しかし、採用試験という状況で高得点になることはまれである。K尺度は精神的健康、自制心、他人に対する気持ちや期待、さまざまな家族関係についての質問項目から構成されている。K尺度は洗練された防衛的態度を測定し、高得点の場合は被験者が「よい振り」をしていると考えられる。したがって、採用試験の場合に建前で回答すると、得点の上昇がみられるだろう。

以上のように、MMPI-1やMINIでは、L、F、Kの3尺度で、ある程度の反応歪曲は測定できる。しかし、いずれも社会的な望ましさを効果的に測定する尺度ではないので、採用試験という状況で、意図的な歪曲を行った場合に敏感に反応しない可能性がある。本研究の目的は、就職採用試験という反応歪曲が起りやすい状況を設定し、MINIを使って意識的な反応歪曲、無意識的な自己防衛による嘘など、社会的に望ましいとされる回答傾向を測定する特殊尺度を作成することである。

方 法

被験者 実験群は、1994年に卒業を迎え、就職活動を行った富山県下の学生77名(男性30名、女性47名、平均21.8歳)、対照群は、富山大学の学生178名(男性101名、女性77名、平均18.6歳)であった。

実験手続き 大学生77名に対し、MINIの冊子・マークカード2枚を与え、普通と建前(嘘)の2つの条件を設定した。1回目は普通条件で、質問に率直に自分の思ったままに回答することを教示して回答させた。2回目は建前(嘘)条件で、「あなたは、第一志望の会社の一般教養と一次面接試験に無事合格しました。二次試験は、あなたがこの会社に適するか否かを判断する心理検査です。これから行う心理検査はあなたの合否が決定する重要な検査ですので、採用されるよう積極的に嘘をついて全力で挑戦してください。」という状況設定を記述した用紙を配付し、自分を良く見せるように積極的に嘘をつくよう依頼し、回答させた。選んだ学生は任意で、教育・経済・工学部と広範囲になるよう、また男女比も同程度になるよう心掛けた。ただし、男女別に分析できる人数ではなかったため、男女一括した。なお、対象群は無条件で1度のみMINIを実施した。

分析手続き 建前(嘘)条件と普通条件、建前(嘘)条件と対照群とのカイ自乗検定(2群間の多変量の比較)を全250項目にわたって行った。その結果、ともに1%水準以下で有意差が見られ、カイ自乗値の高い質問項目から順に集め、暫定版尺度を構成した。次に暫定版尺度の得点を算出し、MINIの標準化データ(319名)を用いて暫定版尺度の得点と質問項目との相関係数を算出した。その結果、1%水準以下で有意差が見られ、相関が.25以上の項目を選び出し、相関の小さな項目から順に除外し、 α 係数を最大化するように項目の選択を行った。

結 果

最終的に40項目が建前尺度として選択された。最終的に選定された項目のカイ自乗値と尺度得点との相関係数の値をカイ自乗値の高い項目から並べたものを表1に示した。なお、採点方向は相関係数がプラスの場合に「はい」で採点する。

標準化 MINIの標準化データをもとに標準値を求めると、男性は平均21.068 ($\sigma = 7.710$), 女性は平均19.637 ($\sigma = 6.871$)であった。

再検査信頼性 MINI再検査信頼性データ(村上・村上,1992)から再検査法による信頼性係数を算出すると再検査信頼性は.902と極めて高い数値であった。一方、 α 係数は、.441と低く、さまざまな内容の項目から構成されていることを示していた。

判別力について 建前(嘘)条件、普通条件と対照群のそれぞれの尺度得点を算出した結果、建前(嘘)条件で平均34.558 ($\sigma = 6.072$), 普通条件で平均23.299 ($\sigma = 7.669$), 対照群で平均20.685 ($\sigma = 8.059$)であった。普通条件と対照群から建前(嘘)条件を効果的に判別できる得点を求めるため、度数分布表を作成した。すると、建前(嘘)条件の平均は34.558であるが、全体の75.4%が34点以上に集中していた。

度数分布表の観察をもとに各条件を判別する値を調べると、建前(嘘)条件と普通条件の分岐点が約30点、建前(嘘)条件と対照群の分岐点が約28点であった。全体的には、建前(嘘)条件を普通条件や対照群から判別する値は、28~30点であった。なお、素点の30点を $10(X - \bar{X})/\sigma + 50$ によって標準得点に換算すると、それぞれ62点、65点となる。また、35点では、それぞれ68点、72点となる。

30点で区別してみると、建前(嘘)条件の84.5%が正しく判別され、普通条件の18.2%、対照群の15.3%が誤って判別された。また、35点で区分すると建前(嘘)条件の74.0%が正しく判別され、普通条件の6.5%、対照群の2.2%のみが誤って判別されるだけであった。

表1 最終的に選定された建前尺度40項目のカイ自乗値(建前条件と実験条件の比較)と尺度得点との相関係数

項目	カイ自乗値	相関係数	項目	カイ自乗値	相関係数
5	53.748	.406	41	22.621	-.424
11	19.050	.397	43	15.304	-.511
30	36.075	.430	49	35.316	-.525
34	14.198	.250	54	31.516	-.376
39	14.676	.319	64	29.380	-.393
66	20.893	.389	78	33.486	-.474
109	65.530	.395	79	17.197	-.414
112	11.635	.373	88	20.463	-.305
123	13.996	.304	130	54.519	-.424
127	9.521	.324	158	23.469	-.504
135	19.467	.310	164	13.775	-.401
148	29.913	.380	174	26.351	-.468
149	17.530	.473	176	12.031	-.393
150	25.160	.374	187	18.255	-.483
188	19.237	.485	190	25.986	-.410
205	16.173	.329	212	44.457	-.469
207	26.167	.396	217	19.953	-.333
232	11.057	.386	239	13.756	-.347
233	30.217	.298	240	24.707	-.545
36	25.130	.375	245	26.270	-.427

考 察

採用試験の建前尺度は40項目から構成され、再検査信頼性は.902と極めて高い値が得られた。項目内容が多岐にわたるため内的整合性は.441と低かったが、信頼性の高い尺度であった。この尺度の判別力は高く、普通条件と対照群から建前(嘘)条件を区別することは容易であった。もっとも効果的に判別できる得点は素点の30点であったが、素点で35点、すなわち、標準得点約70点以上の場合は建前で回答していると判断しても、ほとんど誤りはない。

MINI基本尺度について、建前(嘘)条件と普通条件の平均値をプロットしたものを図1に示す。建前(嘘)条件では、LとKが顕著に上昇し、Mf(男性性・女性性)を除く基本尺度が低下していた。図には表現されていないが、このとき建前尺度は

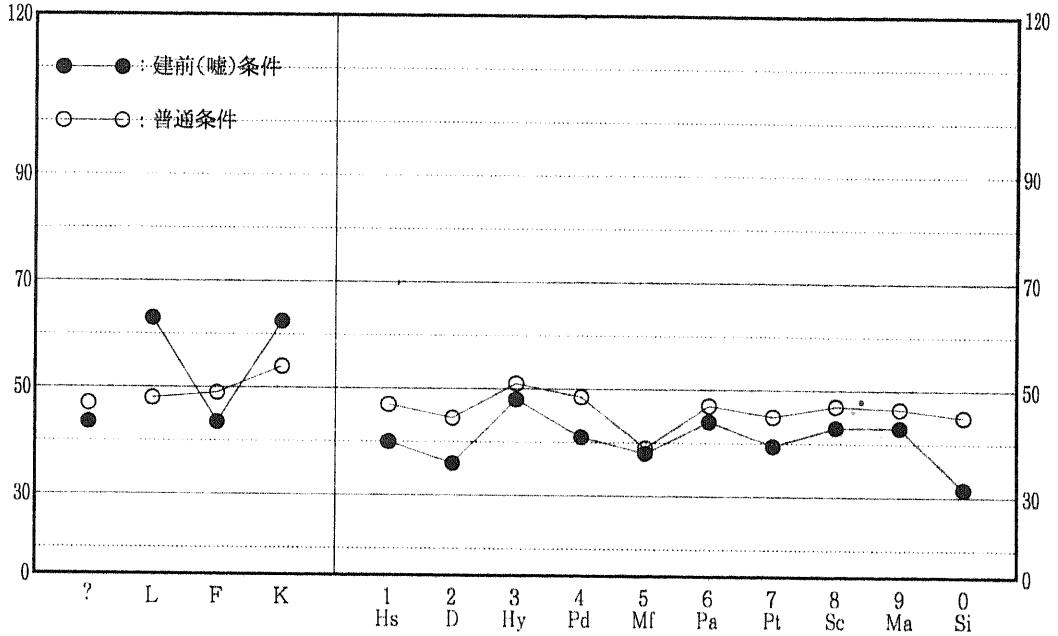


図1 建前(嘘)条件と普通条件の平均プロフィール

標準得点70点前後の顕著な上昇を示す。

建前尺度とMINIの尺度との相関を求めたものを表2に示す。Lとは有意($p < .01$)ではあるが0.170の相関しかなく、Fとは-0.457、Kとは0.683の相関があった。基本尺度では、Hs(心気症)と-0.468、D(抑鬱)と-0.686、Pa(妄想症)と-0.416、Pt(精神衰弱)と-0.757、Sc(精神分裂病)と-0.519、Si(社会的内向)と-0.894、内容尺度では、DEPと-0.689、SUSと-0.417、BODと-0.523、SOCと-0.878、TENと-0.476の有意な相関があった。

表2 建前尺度とMINI尺度との相関係数

L	0.170	Ma	-0.181
F	-0.457	Si	-0.894
K	0.683	DEP	-0.689
Hs	-0.468	ASS	-0.389
D	-0.686	SUS	-0.417
Hy	-0.006	PAR	-0.396
Pd	-0.399	SOD	-0.523
Mf	-0.244	SOC	-0.878
Pa	-0.416	TEN	-0.476
Pt	-0.757	FEM	-0.228
Sc	-0.519	SAD	0.304

建前尺度は基本尺度と内容尺度の大部分と負の大きな相関をもち、何らかの社会的態度を測定していると考えられる。LとKの上昇でも防衛的態度はある程度わかるが、知的水準の高い人はL尺度の質問項目が見抜けることが多く、社会的場面での防衛的態度は建前尺度のほうがより効果的と思われる。さらに、MMPI-1やMINIのL尺度はすべて「いいえ」の方向のみで採点するが、最近の測定理論からは望ましいことではない。偶然ではあるが、建前尺度は「はい」の方向と「いいえ」の方向で採点する項目が混ざり合っている点も望ましい。建前尺度は就職試験での防衛的態度に限定して開発されたが、質問項目を容易には見抜けないため、就職試験以外での社会的望ましさを測定する尺度としても有用と思われる。

ストレス尺度

目的

児童・生徒のいじめや登校拒否が多発し、社会問題化すると同時に、教師が教育現場で抱える問題も増加している。教師のストレスは教師個人の

問題ではなく、児童・生徒にも深刻な影響を与えるので、教育全体にかかわる問題と言える。教師のストレスが重大な問題であるにもかかわらず、日本での調査研究は乏しい状態にある。

原田・中塚(1990)はウィルソン・ストレス診断テストの項目を引用して作成された34項目から構成されたチェックリスト法を四国の教師に実施した。得られた227名の回答に因子分析法を適用し、心理的ストレス、対人関係ストレス、職務的ストレス、対生徒ストレス、身体的ストレスと名付けられた5因子を抽出し、日本の教師のストレス構造はアメリカとは異なっていることを示した。

中塚・原田(1990)はこの日本版ウィルソン・ストレス診断テストの妥当性を被験者集団の分析にもとづいて検討した。職務的ストレスは小学校の普通学級の教師が高得点であり、対生徒ストレスは中学校の普通学級の教師がとくに高得点であった。対人的ストレスは養護学級や特殊学級で高得点であり、それぞれ妥当な結果が得られた。

ところで、この日本版ウィルソン・ストレス診断テストの質問項目には反応歪曲を検出する妥当性尺度は含まれていない。大多数の被験者は正直に回答するかもしれないが、無意識的な反応歪曲が働く可能性もある。質問項目には具体的な教育場面に関するものが多く、道徳意識や利害関係などと絡んで、社会的望ましさの変量が反応歪曲をもたらす恐れが大きい。そこで本研究ではMINIを用いて、教師ストレスを測定する特殊尺度を作成することとした。

方 法

調査用紙 冊子方式のMINIと日本版ウィルソン・ストレス診断テストを利用した。MINIは質問用冊子とマークカードを各被験者に渡した。日本版ウィルソン・ストレス診断テストはB4、1枚に質問項目を印刷したもので、回答は5段階評定法であった。

調査手続き 富山県の小学校、中学校、高等学校、特殊学校などに勤務する現職教師155名にMINIの冊子、マークカード、日本版ウィルソン・ストレス診断テストを配布し、10日以内に回答するように依頼した。学校の規模、種類は片寄りのない

ようにした。質問用紙などの配布、回収は管理職、同僚によって行われた。ウィルソン・ストレス診断テストの中に管理職、同僚との人間関係に関する項目が含まれていたため、回答は無記名で行った。

被験者 両テストとも無回答の者45名、MINIのみ無回答1名、ウィルソン・ストレス診断テストのみ無回答4名、さらにMINIの無回答が6つ以上の者3名を被験者から削除した。最終的に被験者は現職教員102名(男性41名、女性61名)。年齢は未記入者4名を除いて計算した。平均は男性38.4歳、女性34.4歳であった。

分析手続き 原田・中塚(1990)によるとウィルソン・ストレス診断テストは5因子から構成されている。しかし、主因子解を求めると、固有値は10.838, 2.386, 1.380, 1.323, 1.177, 0.924と減少し、 α 係数は0.935, 0.598, 0.284, 0.252, 0.147, -0.084と減少した。固有値と α 係数からは1~4因子解が妥当と思われる、5因子解の採用は難しかった。もっとも安定した因子は第1因子であり、全体的なストレスレベルに関係していた。それで、特殊尺度の作成はこの因子を基準に作成することにした。

まず、ウィルソン・ストレス診断テストの総得点とMINI質問項目との相関係数を求め、相関の高い項目を集めて、暫定版尺度を作成し、 α 係数による内的整合性を検討した。導き出されたストレス症状尺度の信頼性と妥当性の問題を、村上・村上(1992)のMINI再検査信頼性データ、および、MMPI-1標準化データを利用して検討した。

結 果

項目分析 ウィルソン・ストレス診断テストの「まったくない」から「いつも」の回答に1~5点を与え、各被験者ごとに総得点を算出した。因子分析によると、第1因子の負荷量はすべてプラスであり、そのウェイトも高く、総得点はストレスの強度を表わすと考えられた。その総得点とMINIの各項目との相関係数を求め、5%水準以下の危険率で有意な相関が認められる99項目を選び出した。さらに、99項目の中からウィルソン・ストレス診断テストの総得点と相関が高く、内的

表3 最終的に選定されたストレス症状尺度
23項目と日本版ウィルソン・ストレス
診断テストとの相関係数

項目	相関係数	項目	相関係数	項目	相関係数	項目	相関係数
13	.406	78	.422	131	.355	209	.405
43	.422	85	.427	157	.423	225	.465
44	.369	87	.377	164	.501	231	.369
47	.355	117	.397	168	.359	245	.382
49	.398	121	.424	178	.517	234	.375
73	.372	130	.365	185	.448		

整合性(α 係数)が高くなるように項目を選択し尺度構成を行った。ストレス症状尺度の得点は相関がプラスの項目は「はい」の方向で、マイナスの項目は「いいえ」の方向で採点した。このような作業からS1~S13の暫定版尺度を作成した。

暫定版ストレス症状尺度はいずれも α 係数が.851~.904で、内的整合性が極めて高いことを示していた。一方、相関係数は.724~.739で、採用項目を増加させてもほとんど変化がなかった。S4は少数の項目から構成され、相関係数は.739ともっとも高く、 α 係数も.879と満足できる値であったので、これをストレス症状尺度として採用した。ストレス症状尺度の項目と日本版ウィルソンストレス診断テストとの相関を表3に示す。

標準化 MINI 標準化データから標準値を求めると、男性は平均7.441($\sigma = 4.861$)、女性は平均7.418($\sigma = 7.418$)であった。

再検査信頼性 MINI 再検査信頼性データ(村上・村上,1992)から再検査法による信頼性係数を算出すると.831で、かなり良好な値であった。

ストレス症状尺度の因子分析 MMPI-1 標準化データを元にストレス症状尺度を構成する23項目に最小残差法による因子分析を適用したところ、固有値は10.84, 2.39, 1.38と減少し、第2因子の固有値が小さく、 α 係数もほぼ0となったので、1因子的であることが確認された。

妥当性の検討 MMPI-1 標準化データを用いてMMPI-1の129尺度とストレス症状尺度との相関を算出した。顕著と言える相関はなかったが、多数の尺度と有意な相関があった。.40以上の尺度

を挙げると、Ptと.426, Si1(劣等・個人的不快)と.415, DEP(抑鬱)と.420, A(不安)と.443, Ca(頭頂前頭葉損傷)と.418, Dy(依存)と.412, MAD(顕在性不安-防衛)と.411, R-S(抑圧-鋭敏化)と.420, Ts(自殺の兆候)と.411の相関があった。

考 察

開発されたストレス症状尺度はMINIの23項目から構成され、日本版ウィルソン・ストレス診断尺度の総得点と.739の相関を持ち、顕著とは言えないが、十分に教師ストレスを測定する尺度であることを示した。また、内の一貫性は α 係数で.879と極めて高かった。最小残差法による因子分析結果も一因子解であり、これが一次的な尺度であることを示した。また、再検査信頼性係数も.831とかなり優秀な値を示していた。これらのことからストレス症状尺度は高い信頼性を持つと推論できる。

ストレス症状尺度の項目内容を観察すると、仕事の悩み、虚しさ、自信のなさ、心労、精神状態の悪さ、後悔などの精神症状や、頭の締め付け、筋肉の痙攣などの身体症状を表わす項目から構成されている。さらに、MMPI-1の尺度との相関分析から、ストレス症状尺度は、不安、心労、劣等感、抑鬱、依存性、抑圧的な回避行動、自殺傾向などかなりの関係を持つことが確認された。

項目の内容分析と相関分析の結果から、この尺度は被験者の受けているストレスのレベルを測定すると考えるべきではなく、ストレスから現れた精神症状を測定すると考えた方が妥当である。高得点者ではストレス症状が顕在化したと解釈できる。また、低得点者はストレスから自由で気楽で、何の心配もないと考えられる。しかし、中位の得点では、ストレス症状が顕在化していないことが分かるだけである。ストレスをたいして受けていないのか、あるいは、強いストレスを受けているが、ストレス耐性が強いためにストレス症状が顕在化していないのか、判別はできない。

ストレス症状尺度は教師ストレスの測定のために構成されたが、相関分析の結果や項目内容からは教師固有のストレスを測定しているのではなく、より一般的なストレス症状群に関係すると思われ

る。そのため、この尺度の名称はストレス症状尺度とした。この尺度は鋭敏な尺度ではない。例えば、ストレス尺度の上昇巾以上に Pt や DEP, PAR などの尺度が顕著に上昇しがちである。しかし、一方では、ストレス症状尺度は一般的な適応レベルを妥当な範囲で測定しているように思われる。

非行尺度

目 的

Hathaway and Monachesi (1957) は MMPI を用いて、ミネソタ州の中学 3 年生 (9 年生) の約 3 割を対象として、10 年間にわたる追跡調査をし、非行予測因子を導き出す研究を行った。その結果、10 個の臨床尺度のうち非行予測に敏感なもの (Pd, Pa, Sc, Ma) と、逆に非行抑制傾向を表すもの (D, Hy, Mf, Si) があることがわかった。また、単一の新しい「非行予測尺度」De を誘導してみたが、妥当性が低くて実用的ではなかった。このほか、Gough and Peterson (1952) の De, Kanun and Monachesi (1960) の Delinquency, 日本では Abe (1969) の非行尺度が報告されているが、現在では利用されていない。

そこで本研究では、調査対象を非行少年群 (非行群)、普通少年群 (無非行群) と設定し、MINI を用いて非行尺度の構成を行うことにした。MINI を使用した理由として、基本尺度が MMPI-1 と .90 から .95 の相関があり、ほとんど同一の解釈が許されること、また、項目数が MMPI の項目数の半分以下で、少年に対する負担が少ないことであった。

方 法

被験者 非行群は、少年院で矯正処遇中にある少年 31 名。平均年齢は 17.6 歳、範囲は 15 歳から 22 歳であった。全員、一般短期処遇を受けていた。すなわち、収容期間は 6 か月以内 (実際の在院期間は 4 ないしは 5 か月) で、非行の傾向がある程度進んでいるが、少年の持つ問題性が単純、若し

くは比較的軽く、早期改善の可能性が大きい少年たちであった。少年院によると、1) 知的に劣るものはほとんどおらず、6 割は高校進学歴があった、2) 8 割以上は無免許運転の経験者であった、3) 8 割以上はシンナーなどの吸引経験者であった、4) 経済的には中流以上で、親子の絆は弱く、快楽追及型が多いということであった。

なお、無非行群は富山県の高校 2 年生の男子 65 名で、担任によって非行のないことが確認された。平均年齢は 16.6 歳で、範囲は 16 歳から 17 歳であった。両群とも調査は少年院、および、高校の各クラスの教師指導のもとに集団で実施された。

分析手続き 非行群と無非行群に MINI の冊子とマークカードを渡し、回答させた。その回答にカイ自乗検定 (2 群間の変量の比較) を全 250 項目にわたって行い、ともに 5% 水準以下で有意差が見られ、カイ自乗値の高い質問項目から順に集め、暫定版尺度 (73 項目) を構成した。次に暫定版尺度の得点を算出し、MINI の標準化データ (319 名) を用いて暫定版尺度の得点と質問項目との相関係数を算出した。その結果、1% 水準以下で有意差が見られ、相関が .31 以上の項目を選び出し、相関の小さな項目から順に除外し、 α 係数を最大化するように項目の選択を行った。

結 果

最終的に 20 項目が非行尺度として選択された。 α 係数は .672 で、内的整合性は普通程度であった。最終的に選定された項目のカイ自乗値と、尺度得点との相関係数の値をカイ自乗値の高い項目から並べたものを表 4 に示した。なお、採点方向は相関係数がプラスの場合に「はい」で採点する。

標準化 MINI の標準化データをもとに標準値を求めると、男性は平均 11.000 ($\sigma = 3.771$)、女性は平均 10.134 ($\sigma = 3.521$) であった。

再検査信頼性 MINI 再検査信頼性データ (村上・村上, 1992) から再検査法による信頼性係数を算出すると .862 で、かなり良好な値であった。

判別力について 非行群と無非行群の尺度得点を算出した結果、それぞれ平均 14.677 ($\sigma = 2.982$)、6.646 ($\sigma = 3.247$) であった。非行群と無非行群の素点分布をプロットすると、両群が重なり合っ

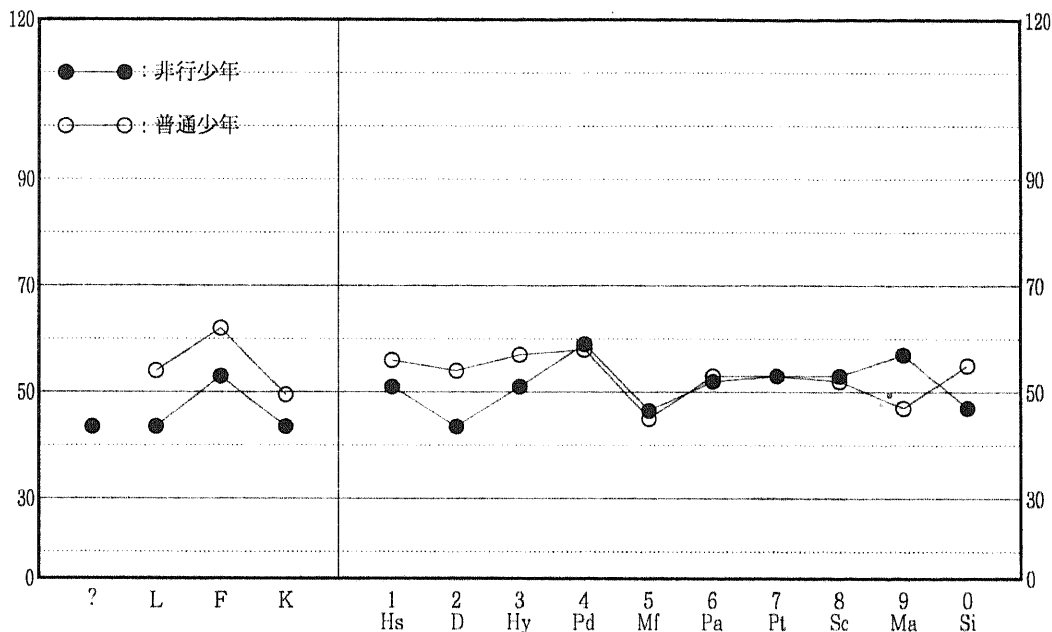


図2 非行群と無非行群の平均プロフィール

表4 最終的に選定された非行尺度20項目の
カイ自乗値と尺度得点との相関係数

項目	カイ自乗値	相関係数	項目	カイ自乗値	相関係数
5	14.583	.474	188	24.611	.515
33	18.087	.367	198	9.318	.466
34	14.050	.556	204	12.291	.414
46	9.656	.329	207	4.064	.359
50	6.449	.355	213	22.559	.402
66	16.568	.460	218	23.976	.326
94	6.056	.307	229	37.167	.345
124	7.115	.541	233	23.810	.557
151	12.939	.454	29	6.959	-.366
166	9.619	.381	116	11.651	-.337

いる人数は28人(29%)であった。分割点を12点、標準得点53(男)、55(女)とすると、無非行群では7人(7%)、非行群では、5人(5%)が間違っ
て判別された。分割点を14点、標準得点58(男)、61(女)とすると、両群の判別は完全であった。
したがって、標準得点60点以上を非行傾向ありと判断すれば、間違いなく判別できることがわかつた。

考 察

本研究では、非行群と無非行群に MINI を実施し、全250項目に、カイ自乗検定を行い、カイ自乗値が5%水準以下のもの、73項目を選び出した。この73項目で暫定版尺度を構成し、その素点と質問項目との相関分析を行った。そして、相関の低い項目を除去して非行尺度を構成した。非行尺度は20項目で、再検査法による信頼性係数が.862、 α 係数が.672であった。判別力は優れており、標準得点60点で非行群と無非行群の判別は完全であった。

非行群と無非行群の MINI の平均プロフィールを図2に示す。非行少年は普通少年に比較して、全体的に妥当性尺度ではL, F, Kが低かった。臨床尺度ではHs, D, Hyが低く、Maが高かった。旧三京房版MMPIを使った研究だが、小野(1981)は非行男女の平均プロフィールを示している。妥当性尺度の記載はないが、HyとPdが上昇していた。しかし、無非行の対照群がないため、Pdの上昇を非行少年のみの特徴と解釈していた。図2を見ると、Pdの上昇は普通少年にもみられる思春期の特徴の一種で、非行少年のみの特徴では

ないことがわかる。

非行群は男性のみで女性が含まれていないため、女性の非行については、どの程度の予測力があるのか、判断できない。今後、別の被験者集団で、非行尺度の判別力を確認する必要がある。

謝辞 本論文は著者の指導のもとに研究を行った3名の教育心理学専攻生、森田成香(1994年)、天池恭子(1992年)、吉田真木(1994年)の卒業論文に追加分析を行い、許可を得て、筆者の責任で執筆し直したものである。彼女らの貢献に感謝する。

引用文献

- Abe, M. 1969 The Japanese MMPI and its delinquency scale. *Tohoku Psychological Folia* 28, 54-68.
- Butcher, J. N., Graham, J. R., and Ben-Porath, Y. S. 1990 *Development And Use of The MMPI-2 Content Scales*. University of Minnesota Press: Minneapolis.
- Gough, H.G., and Peterson, D.R. 1952 The identification and measurement of predispositional factors in crime and delinquency. *Journal of Consulting Psychology* 16, 207-212.
- 原田和幸・中塚善次郎 1990 教育現場における教師のストレス(1). 一ストレス尺度の構成一. 日本心理学会第32回大会発表論文集 482.
- Hathaway, S.R., and Monachesi, E.D. 1957 The personalities of predelinquent boys. *Journal of Criminal Law, Criminology, and Police Science* 48, 149-163.
- Helmes, E., and Reddon, J. R. 1993 A perspective on developments in assessing psychopathology: a critical review of the MMPI and MMPI-2. *Psychological Bulletin* 113, 453-471.
- Kanun, C., and Monachesi, E.D. 1960 Delinquency and the validating scales of the MMPI. *Journal of Criminal Law, Criminology, and Police Science* 50, 525-534.
- Luh, W., Olejnik, S., Greenwood, G., and Parkay, F. 1991 Psychometric properties of the Willson Stress Profile for Teachers. *Journal of Social Behaviour and Personality* 6, 255-270.
- MMPI 新日本版研究会編 1993 MMPI マニュアル'93. 三京房: 京都.
- 村上宣寛 1991 MINI 性格検査の開発手続きについて. 富山大学教育学部紀要 40, 49-61.
- 村上宣寛 1993 最新コンピュータ診断性格テスト. 一こころは測れるのか一. 日刊工業新聞社: 東京.
- 村上宣寛・村上千恵子 1992 コンピュータ心理診断法. 一MINI, MMPI-1 自動診断システムへの招待一. 学芸図書: 東京.
- 村上千恵子・村上宣寛 1994 なぜ MINI, MMPI-1 が必要なのか. 精神科診断学 5, 103-114.
- 中塚善次郎・原田和幸 1990 教育現場における教師のストレス(2). 一ストレス尺度の妥当性の検討一. 日本心理学会第32回大会発表論文集 483.
- 小野直広 1981 日本の非行少年に特徴的にみられる MMPI プロフィール型. 犯罪心理学研究 17, 1, 1-11.

A 建前尺度の質問項目と採点方向

<はいの方向へ採点する項目>

5. 機会さえ与えられれば、皆の良いリーダーになれると思います。
11. 皆がすでに集まって話をしている部屋に、一人で入るのは嫌ではありません。
30. 疲れやすくはありません。
34. パーティや親睦会が好きです。
39. ここ2~3年はいつも健康でした。
66. ほとんどの知人から好かれています。
109. 自信に満ちあふれています。
112. 回りにいる人と同じくらい、私にも能力があって利口だと思います。
123. 家族には、私をひどく悩ませたり、いらだたせる癖のある人がいます。
127. 心臓が激しく鼓動したことはほとんどないし、めったに息切れもありません。
135. 私は重要人物です。
148. 大勢の中で、自分がよく知っていることについて、議論をしたり、意見を述べるように求められても、どきまぎすることは無いと思います。
149. 特に人前を気にする方ではありません。
150. 毎日、面白いことがいっぱいあります。
188. 他の人と同じように、すぐに友達ができる方だと思います。
205. つきあいは良い方です。
207. いつも幸福です。
232. 他の人と同様に、神経質ではないと信じています。
233. ダンスパーティに行くのは好きです。

<いいえの方向へ採点する項目>

36. すぐに決心がつかなかったために、欲しいものを手に入れ損なうことがよくあります。
41. 他の人のように楽しかったらなあ、と思います。
43. すぐに、まごまごします。
49. 私はたしかに自信に欠けています。
54. たとえ他の人がやっても、パーティで隠し芸をするのは嫌いです。

64. 非難されたり、叱られたりすると、ひどく傷つきます。
78. 物事がうまくいかないと、すぐに投げ出しなくなります。
79. 人が大勢いると、適当な話題を思いつくのに苦労します。
88. 時々、口ぎたなくのしりたくなります。
130. 危険や困難なことに直面すると、尻込みします。
158. 学校ではクラスの人達の前で話すのがひどく苦手でした。
164. 数日、数週間、あるいは、数ヶ月にもわたってきっかけがつかめなくて、仕事が手につかなかったことがあります。
174. 初対面の人と話をするのは骨が折れるものです。
176. なぜあんなに不機嫌で気難しかったのか、自分でも分からないことがしばしばあります。
187. 何かを始めるのはおっくうです。
190. 時々、頭の働きがいつもより鈍くなるような気がします。
212. 自分にはそれをする力がないと思って、あきらめてしまったことが何回かあります。
217. 言い争いと簡単に負けてしまいます。
239. むずかしいことが次から次へと出てくるので、時々、もうどうしようもないと感じることがあります。
240. くよくよ考え込みます。
245. 他の人と比べると、よく後で後悔するようなことをしてしまいます。

B ストレス症状尺度の質問項目と採点方向

<はいの方向へ採点する項目>

13. 仕事や任務に熱中するのはむずかしいと思います。
43. すぐに、まごまごします。
44. むなしとつくづく感じる事がよくあります。
47. 時々、物をこなごなに壊したくなります。

49. 私はたしかに自信に欠けています。
73. たいてい、何か悪いことや間違っことをしてしまったような気がします。
78. 物事がうまくいかないと、すぐに投げ出したくなります。
85. 何か大事な仕事をしている時に、相談を受けたり邪魔されたりすると、我慢できなくなります。
87. 時々、どうでもいいようなことが頭の中を駆け巡り、何日も悩んだりします。
117. こんなに恥ずかしがり屋でなければ良いのにと思います。
121. 物事を難しく考えがちです。
130. 危険や困難なことに直面すると、尻込みします。
131. 時々、自分自身か、他人を傷つけずにはいられないような気分になります。
157. 精神状態はあまり良くありません。
164. 数日、数週間、あるいは、数ヶ月にもわたって、きっかけがつかめなくて、仕事を手につかなかったことがあります。
168. 何もできなくなり、回りで起こっていることも分からなくなったことがあります。
178. 誰かと一緒にいる時でも、孤独に感じるがよくあります。
185. やってみたいことでも、他の人にその価値はないと思われると、止めてしまいがちです。
209. いつも体がすっかり弱っているような気がします。
225. 自分は非難されるべき人間だと思います。
231. 頭がきつく締めつけられるような感じがよくします。
245. 他の人と比べると、よく後で後悔するようなことをしてしまいます。

<いいえの方向へ採点する項目>

234. 筋肉がひきつったり、痙攣したりすることは、めったにありません。

C 非行尺度の質問項目と採点方向

<はいの方向へ採点する項目>

5. 機会さえ与えられれば、皆の良いリーダーになれると思います。
33. 時々、精力がみなぎります。
34. パーティや親睦会が好きです。
46. 私の母は立派な人でした。
50. レースやゲームはお金を賭けた方が楽しい。
66. ほとんどの知人から好かれています。
94. 時々、何の理由もなく、さらにはうまくいっていない時でさえ、世の中で一番幸せだと感じることがあります。
124. 人と一緒にいられるだけで、社交的な集まりは楽しい。
151. 知らない人に会うのは嫌ではありません。
166. 退屈すると、何か騒ぎを引き起こしたくなります。
188. 他の人と同じように、すぐに友達ができる方だと思います。
198. 人生は有意義だといつも感じます。
204. 何か刺激的なことがあれば、たいてい憂鬱な気分から抜け出せます。
207. いつも幸福です。
213. 学校が好きでした。
218. 時々、危険でぞっとするようなことを、したくてたまらなくなります。
229. 浮気がしたい。
233. ダンスパーティに行くのは好きです。

<いいえの方向へ採点する項目>

29. できるだけ人ごみを避けるようにしています。
116. スリルを味わうだけのために、危険なことをしたことは一度もありません。